『比較民俗研究』17. 2000／3

N・ネフスキーの生涯と柳田民俗学の方法
――とくに言語学的方法をめぐって――

飯島　吉晴※

ニコライ・アレクサンドロヴィッチ・ネフスキーは，1892年2月18日にヴォルガ河岸の古都ヤロスウラリ市で生まれた。ネフスキー（愛称はコーリャ）は，生後まもなく母親を亡くし，1896年には地方裁判所の予備判事であった父親とも死別するなど，幼少期から肉親の愛情にはめぐまれていない。両親と死別したネフスキーは，ルィビンスク市で教会の聖職者であった母方の祖父N・A・サスニンのもとに引き取られ，ここで少年時代を過ごすことになる。ネフスキーの思い出の地であり生涯の故郷ともなったルィビンスク市は，ヴォルガ河とシェクスナ川との合流する交通の要衝地として古くから発達し，すでに12世紀の地方行政文書に登場している。シェクスナ川のチョウザメは有名で主にモスクワの宮廷に運ばれていたが，17世紀にはその漁区の中心地として知られるようになった。19世紀初めにはその人口はわずか2600人ほどにすぎなかったが，その後ヴォルガ河流域から首都ペテルブルクへの穀物輸送の中継港として発展し，19世紀末には25000人以上に急増している。船着場は全部で9つあり，1シーズンには15000隻の舟籍が到着し，穀物の総重量は8000万プード（1プードは18.38kg）に達していた。河港には船のマストが林立し，河岸には穀物取引所の倉庫群が立ち並び，日祝祭日を除いて取引がなされ活気に満ちていた。19世紀末には蒸気機関車による鉄道の発達で穀物取扱量はやや減少するが，商業都市としてのルィビンスク市の重要性は変わらなかった。ルィビンスクはこの地域最大の定期市のたつ場所でもあり，毎年7月の聖ペトロ祭とともに川沿いの広場で約3週間開かれ，ロシアのほかヨーロッパ諸国，アラビアやペルシヤ，インド，中国，朝鮮，日本など世界各地からさまざまな商人が多様な商品や見世物をたずさえて訪れたが，中国の曲芸師のまわりには常に黒山の人だかりであったという。こうした定期市や祭りのもつ独特の祝祭的雰囲気は敏感な年頃の少年たちの心に強い印象を与えるものだが，ネフスキー少年もいつしか未知の東洋の国への漠然とした憧れを抱いたに違いない。幼くして両親と死別したネフスキーは，「ロシア大地の母」と称されるヴォルガ河を眺めるのが好きであったという。

1900年8月に，満8才のネフスキーは祖父母の家で実際に身の回りの世話をしてくれていたワーリャ叔母さん（ワルワラ・ニコラエウナ・クルィロア）に伴われ，ルィビンスク中学への入学手続きをとる。家庭での学習しか知らなかったネフスキーにとって，この中学がはじめての学校体験であったが，入学後まもなく祖父母とも死別し，もっぱらワーリャ叔母の世話になる。ネフスキーは，家庭的な不幸にもめげず，中学校での成績は常に首席を争うほど極めて優秀であり，家計を助けるために自ら家庭教師をつとめた。ネフスキーは夏休みにアルバイトでルィビンスク

※天理大学文学部教授

の北方50kmほどのポシェホニエを訪れた際に約50篇の現地俗謡を記録したといい，最初の民俗学的調査の試みであった。また1904年にはじまった日露戦争で，東洋の新興の小国である日本が帝政ロシアの軍隊を次々に撃破するのを知って，東洋への関心は次第に具体性をおびてきた。ネフスキーが最初に学んだ東洋語はタタール語であったが，モスクワの東洋語専門学校のアラブ・ペルシア語学科で学んでいた友人に影響されて独学でアラビア文字を覚えたりもしていた。肉親に縁の薄かったネフスキーは，その喪失感を好んで口ずさんでいた抒情的な詩や，未知でエキゾチックな東洋の言葉への憧れなどによって満たしていたのかも知れない。

1909年に，ネフスキーはルィビンスク中学校を銀メダルで卒業した。彼は東洋語を学びたがったが，長年面倒をみてくれたワーリャ叔母さんの要望をいれ，17才で故郷を離れて首都のペテルブルク工芸専門学校に入学する。しかし，どうしても東洋語への関心は捨て切れず，翌年夏にネフスキーは一大決心してこの工芸専門学校を退学し，ペテルブルク大学の東洋語学部の中国語・日本語科に入学した。ネフスキーは，東洋の中国語と日本語に長い間惹かれるものがあったのである。この東洋語学部には世界的に著名な碩学が数多くいて，その指導の下に若手研究者が研鑽をつんでいた。またここの教授たちは，大学の研究室のほかに，科学アカデミーに属する東洋研究の資料館であるアジア博物館および民族学博物館という二つの重要な研究施設とも何らかの関係を有していた。ネフスキーも，大学で中国学者アレクセーエフの指導を受けると同時に，民族学博物館のシュテルンベルグのゼミナールを聴講しており，この二人の碩学からその学問の方向や研究方法などでとくに大きな影響を受けている。ロシアの民族学者・古典学者であるシュテンベルグは，追放されたサハリンでの8年余に及ぶギリヤーク，アイヌ，オロッコ，ツングースなどの少数民族などの調査を通して新しい民族学の方法を確立し，1897年に特赦でペテルブルグに戻ったあと，民族学博物館で1904～14年まで民族学をゼミナール形式で講義した。シュテルンベルグは，民族学にとって最も困難でしかも必要な研究は宗教・信仰と社会関係であると考え，そのためにはまず調査対象となる民族の言語の習得から出発すべきであるとし，「自分が関心を寄せている民族の真の生活，とくに心理的側面を理解するためには，その民族の言語を徹底的に研究する必要がある」と主張する。具体的に文字をもたない未開民族の間で一切の仲介者なしで言語学的な研究の方法としては，インフォーマントから短い話を聞き，これを音標文字で書き取り，一つ一つの単語の意味を分析して逐語訳を施し，そこから文法的特徴をつかんで，その民族の生活感情の細部まで立ち入ることが可能となり，信仰や社会関係などを明らかする。シュテルンベルグは，ゼミの聴講生に対して，フィールドワークの際には調査すべき民族の言語の習得のほかに，シャーマニズム，祭式，親族制度などの分野で，ある一定の課題にもとづいた観察を義務づけ，みな自分の調査に夢中になったという。ネフスキーは，この恩師の「言語学的方法」を習得し，のちにそれを独創的に活用したことは，アイヌの民俗，沖縄宮古の民俗，台湾の曹（ツォウ）族などに関するすべての調査ノートにはっきりと示されている。ネフスキーは，「貴方の論文や研究は私にとってこの上もなく貴重なものです。それらは日本の民族学の多くの現象に対して私の目を開かせてくれるからです」と書簡の中で述べているように，絶えずシュテルンベルグの助言

や研究方法から示唆を受けて，1926年の太平洋学術会議に来日した際に東京で再会している。また恩師の死に際しては，心からの追悼文「故シュテルンベルグ氏」を雑誌『民族』2巻4号（1927年）に寄稿している。

1914年に，ネフスキーはペテルブルク大学に李白の詩をテーマとした卒業論文を提出する。指導教授のアレクセーエフはこの論文を激賞し，ネフスキーの並みはずれた才能と研究能力に注目する。卒業後，ネフスキーはペテルブルク大学の日本語の正教授候補として研究をつづけることになっていたが，第一次世界大戦の勃発による予算削減の煽りをうけ無給のまま残された。日本語科では，黒野義文が1888～1916年の30年間ほど講師をつとめ，教科書は『日本外史』であったというから同時代の日本語には遠いものであった。このほかに日本語の達者なロシア外務省の役人も講師に来ていたらしいが，多忙なため授業は退屈なお粗末なもので，半時間もしてみな疲れてくると，「君ら，おめこという日本語知っているか。ちょうど目のような形をしているので，そういうのだ。あッもう時間が来たから，今日はこれで失敬するよ」（高橋盛孝「ネフスキー氏について」『日本民俗学大系』12巻，平凡社，1959年）という具合であったという。そういう状況でこの時期，大学では日本語の新しいスタッフが必要とされていたのだが，戦争のために話がたち消えになってしまったのだった。南方熊楠の場合は，南阿戦争のためにケンブリッジ大学の日本学の助教授就任が中止になっている。そこで，ネフスキーはエルミタージュ博物館に就職し，勉学のかたわら中国と日本の古銭の整理にあたった。1915年には，2年間の予定で日本文学，日本語の研究のためペテルブルク大学派遣の官費留学生として日本に留学することになった。ネフスキーは，すでに1913年に2カ月間，憧れの日本に旅行し，東京で日本文学の研究をしている。長崎に着いた時，ロシアで習った日本語を使ってみたが，言葉が通じずにみなポカンとしていた時には本当に情けなかったという。後年，ネフスキーが日本で調査旅行に行った際には，たいていその地方の方言を使ってみて，正しい語音かどうかを確かめるのが常であった。

1915年7月に日本に着いたネフスキーは，最初は東京本郷の菊富士ホテルに滞在したが，半年後にはソ連における「日本学の父」と称された一つ年上の生涯の盟友コンラドと一緒に本郷駒込林町に下宿した。日本にはすでに，同じペテルブルグ大学の卒業生であったコンラドと仏教哲学者のローゼンベルグが留学生活を送っていた。これらの官費留学生には，1カ月500円（当時の大学教授の月給は100円ほどであった）支給され，使いきれない位の額であったという。半世紀後，コンラドは，当時を思いおこして，「学問上の問題にすごく熱中していた私たち三人は，ある日のこと夜おそくまで話し合い，私たちの日本研究をそれぞれ分け合うことにきめたのです。ローゼンベルグは仏教哲学を，ネフスキーは“神道を手に入れ”，私は日本における中国文化―漢文ものにしました」（『今日のソ連邦』1966年第6号）と回想している。日本でネフスキーは，まず漢学者の高橋天民について漢文を学んだが，大学などによらず独力で日本の古代文化の研究をすすめた。最初は祝詞に関心をもち，神道が日本人の生活の中でどのように生きているかを研究するために，古書店の主人から中山太郎を紹介された。さらに中山を通して柳田や折口信夫，金田一京助，山中共古，佐々木喜善など当時の民俗学者たちと知り合う。ネフスキーは，中山や

折口と3人で月2回ほど柳田邸を訪れて「古風土記逸文」の輪講を行ったが，日本での最初の論文「農業に関する血液の土俗」はその成果であった。このほか，折口信夫，山中共古，三田村鳶魚らの研究会や講義にも出席した。ネフスキーは他人の知識を貪欲に吸収する一方で，自らの知識も惜しげなく他人と共有する真の意味の学者であった。1916年8月にネフスキーは中山太郎と一緒に茨城県北部の安寺，持方村を旅行し，持ち前の好奇心から目についたものを片っ端から質問責めにしたらしい。中山太郎は「持方の一夜－土俗採集の見学旅行の記」(『旅と伝説』2巻3号，1929年）の中で，ネフスキーとの旅行ではどこでも子供がぞろぞろ付いてくるのが一番閉口するが，「然もネフスキー氏が中々の神経家の気六つかし屋と来てゐるので，『外国人だよ』には平気だが『異人』と言はれると妙にお冠りを曲げて機嫌を損じ『私は異人ではありません，どこが人間と異つたところがあるのです』ときめつけるのである。これは『異国人』の約言であつて『人と異ふ人』といふ意味ではないと，幾ら説明しても承知せぬのには全く弱らせられる。第二に閉口することは歩きながら質問責にされることである。ネ氏の眼には山でも川でも村でも家でも，人間でも飛禽でも走獣でも，何でも彼でも珍らしく映るのであるから，それからそれへと質問が続くのである。村の入口に藁人形の立てゝあるのを見ると『アレは何ですか』と来る。『あれは鹿嶋神を祭る大助人形とてふもので，此の辺は鹿嶋信仰の盛んなところであるから，これを拵へて祭るのだ』と答へると，更に『鹿嶋神と大助人形との関係は』と来る。その説明が済んだと思ふ頃に村の出口へ来て道路衢神を見つけて『アレは何ですか』とやられる。その説明が終わると今度は村童の履いてゐる草履が東京のとは形が違ふが，どういふ訳かと質問される。かゝる次第で説明役の私は汗と唾が一諸に出る騒ぎで実に閉口せざるを得ぬのである」と述べている。これは同時に正統な言語学的方法を駆使して調査するネフスキーの姿勢をよく示している。後年，大阪外語学校でネフスキーからロシア語を習った学生の一人は，「ネフスキー先生の日本語もさることながらその方言の巧みさには度肝を抜かれました。初対面の自己紹介で学生の出身地を聞くや否やその方言で話し掛けるのでした。しかもその方言が皆通じるというので二度ビックリしました。東北方言，名古屋方言，大阪方言，岡山方言，福岡方言，鹿児島方言，，，，，日本中の方言が外語大学のロシア語教室に集まったのでした。授業方法も変わっていてさすがに言語学者らしく，ロシア語の字母にはロシア語の発音を完全に表していないといって，ちょっと前まで中学生(旧制）であった我々には何とも奇妙に見えた記号で発音を教えるのでした。文法もそこそこにチェーホフやゴーゴリのテキストを渡し解説するのでした。実に新鮮で楽しい授業でした」(『アイヌ・フォークロア』序，北海道出版企画センター，1991年）と回想している。言語学者ネフスキーの面目躍如たるものがあるが，今も東欧やロシアの大学の日本語学科卒の優秀な学生に接すると，若い日本人の知らない一昔前の礼儀正しい言葉使いや正確な日本語を耳にして驚くことが多い。

1917年には，2年間の留学期間が終わり，ロシア革命による政変のため送金も停止する。しかし，ネフスキーは体調を崩したこともあって帰国を延期し，夏には遠野にも旅行している。遠野では，伊能嘉矩から病除けの藁人形の話を聞いている。ネフスキーが本格的な研究活動を精力的に開始するのはこの後からで，1918年には，折口主宰の『土俗と伝説』に，前述の「農業に関す

る血液の土俗」（1号）のほか，「遠野のまじなひ人形」（2号），「相模の獅子舞ひの歌」（3号）などを発表している。

1919年に，ネフスキーは小樽高等商業学校（現，小樽商科大学）のロシア語教師の職を得た一方で，日本の民俗学研究のほか，金田一京助からはアイヌ語を，上運天（稲村）賢敷からは沖縄の宮古方言を学んだ。これは，日本の古語や古俗の解明には，その周縁地域にあたる東北や沖縄の調査研究が重要であるという明確な問題意識を，ネフスキーがもっていたためである。柳田国男もその中心となって，1922年に南島談話会，1925年には北方文明研究会を組織し，方言周圏論の発表以前からやはり列島の周縁地域の文化に注目し一国民俗学の確立をめざしていた。1927年に，ネフスキーが台湾の曹族の言語調査を行ったのもこの考え方に基づいたものであったが，それは日本民族形成の起源を探ろうとする民族学的な関心からであり，自然科学に属していた民族学を人文科学として確立したシュテルンベルグの影響が窺われる。樺太の少数民族の豊富な調査経験をもつシュテルンベルグは，アイヌの南方起源説を抱いており，「地理的にもまた文化的，肉体的特徴から見ても，アイヌは疑いもなく，アウストロ＝アジア民族のグループに入れなければならない。彼らの毛深さから判断して，アウストロ＝アジアの西の地方こそアイヌの最初の故郷であり，そこから彼らの長い放浪，他の民族，他の文化との接触が始まった」と述べている。神道研究をめざして留学したネフスキーは，本居宣長や平田篤胤らの近世国学者による神道研究では民俗資料が無視されていると批判し，「日本の第一宗教の研究者のとるべき唯一の方法は，比較民族学および自国の民俗学に頼ることである。この中には，何よりもまず，様々な県に現存する物語や伝説，民衆の習わし，迷信，占いや呪術，民衆の祭や儀礼，民衆の踊り，子供たちの遊びなどが入る」と述べ，最終的には「神話発生の出発点，あるいは国の中の神話的な神話的中心を見つけ，それによって神話の地域的発展の経過をある程度まで決定する」（グロムコフスカヤ「宮古のフォークロアの研究者－N・A・ネフスキー」『宮古のフォークロア』所収，砂子屋出版，1998年）つもりであった。ネフスキーは，この「神話創造の中心」の探求のために，柳田の『遠野物語』から民俗事象が豊富に残るとされた東北地方の遠野に出かけたり，その「約束の地」として独特の信仰や習俗が濃厚にみられる隔絶された沖縄の宮古地方に何度も調査に赴き，さらにはアイヌや台湾現住民の曹族の言語や民俗までも研究調査の対象に加えていったのである。ネフスキーは，この民俗の原郷ともいうべき「神話創造の中心」を見いだし，さらにそれを周辺諸国との交流史のなかで検討することで，日本民族の起源や歴史の解明に寄与できると考えていたのである。グロムコフスカヤは，ネフスキーの研究対象がアイヌ，琉球諸島，台湾という順序で展開したのは，恩師シュテルンベルグの日本先住民の末裔アイヌの日本列島への拡がりの道筋をまさに逆に辿ったものであり，偶然ではないとみている。自然人類学分野の最新の学説では，埴原和郎の提唱した日本民族の二重構造モデルが有力視され，日本列島全域に縄文系の古モンゴロイド人が居住していたところに，弥生から奈良時代までの千年間に約100万人規模で寒冷地適応を経た弥生系の新モンゴロイド人が大陸から九州北部から近畿，本州中央部へと流入して日本民族の中核が形成され，列島の南北端の北海道アイヌと琉球人には共通する古モンゴロイド人の形質が

色濃く残されたと考えられている。最近，藤本強も日本列島の文化は単一なものではなく，稲作農耕を基盤とする弥生文化の成立以来，北海道を中心とする「北の文化」，本州から九州までのいわゆる日本文化の中核をなし多大な影響力をもって南北に拡大し続ける「中の文化」，沖縄を中心とする「南の文化」が併存し，北と南には稲作とは異なる狩猟・漁撈・採集を組み合わせた生活文化の伝統が長く存在して「中の文化」とは異なる歴史を展開してきたが，日本文化の行方や将来を考える上で北と南の文化を知ることの重要性を指摘している（『もう二つの日本文化』東京大学出版会，1988年）。大正末から昭和初期にかけて，柳田民俗学が体系化とともに一国民俗学へと次第に閉じられていったのに対して，同時代のネフスキーはむしろより広い民族学的な視角から日本民族や民俗の起源を捉えるべくその視野や研究対象を列島の外へと拡げようとしていたわけである。両者とも，言葉を通して民俗（民族）を探求し，その信仰や心意のひだまで深く分け入ろうとしたが，柳田は分類民俗語彙集の形で資料を整理分類し比較したのに対して，ネフスキーは自らも正確に発音できるほどに正確に言葉を言語学的方法で記録し厳密でより普遍性をもっていた点にその方法論や学問の性格の違いをみることができる。

1920年の夏には，東北地方を縦断して，磐城の高木誠一や遠野の佐々木喜善を訪問し，佐々木とともにオシラサマの共同研究を開始する。ネフスキーは，佐々木と人力車を連ねて村々を訪れ，オシラサマをはじめ古い習俗や伝承などを調査して回ったという。この頃，ネフスキーが東北のオシラサマ信仰に強い関心を抱き研究をすすめていたことは，柳田の『大白神考』所載の書簡など各地の民俗学者との書簡からもわかるが，その研究成果は佐々木との共同調査であるから自分の名前だけで発表する訳にはいかないとして譲歩しあい最後まで刊行しなかった。日本の民俗学にとっては残念なことであった。

1922年に，ネフスキーは大阪外国語学校ロシア語科に転勤し，夏には上運天賢敷とともに宮古島へ第1回目の調査旅行にでかけている。この前年には，柳田や折口が相次いで沖縄へ旅行しているが，ネフスキーは1926，1928年の夏にも宮古に出かけており前後3回の調査旅行を試みている。「アヤゴ研究二篇」，「アヤゴの研究」，「美人の生まれぬわけ」，「宮古島子供遊戯資料」，「月と不死（一），（二）」など宮古島での研究成果の多くは，柳田主宰の雑誌『民族』に1926年から28年にかけて発表されたが，一定の方法論を踏まえたその研究水準は当時群を抜いていた。最近，ネフスキーが宮古島で採集した民話や歌謡関係のロシア語論文がほぼ70年ぶりに翻訳され，『宮古のフォークロア』（砂子屋出版，1998年）として刊行された。これは，1991年に翻訳されたネフスキーの『アイヌ・フォークロア』（北海道出版企画センター）に次ぐものであるが，ネフスキー自筆の大学ノート約1200頁に及ぶ「宮古方言辞典原稿」は未完である。なお，曹族の言語の研究成果は数年前に中国語訳され台湾で出版されたという。日本でのネフスキーの民俗学関連の成果はほぼ書簡も含めて，岡正雄編『月と不死』（平凡社，1971年）としてまとめられ，解説には加藤九祚による詳細なネフスキーの伝記が付されている。これに基づいて，加藤九祚は『天の蛇―ニコライ・ネフスキーの生涯』（河出書房新社，1976年）も著わしている。本稿も事実上この加藤の成果に大幅に依拠したものであり，記して感謝したい。

ネフスキーは，大阪へ転勤した1922年に，小樽で知り合った積丹町出身の網元の娘，萬谷イソ（磯子）と結婚し，1928年には一人娘ネリ（エレナ・ネフスカヤ）が生まれている。この時期，小樽時代に着手した宮古方言の研究のために，直接沖縄に調査に出かけ耳で聞き，口で確かめ，自ら書くという方法を実践する一方で，大阪でもアイヌ語を納得いくまで習得すべく，金田一京助の紹介でアイヌの優れた伝承者，鍋沢ワカルパの娘ユキを招いて半年間習い，同時に厳密な言語学的方法でフォークロアも記録したのである。さらに1927年から同僚の浅井恵倫とともに台湾調査に赴き，同じ方法で曹族の言語と民俗を記録している。ネフスキーの未知の言語への探求心は衰えを知らず，1908年に砂漠の古都クラホトからロシア探検隊が発掘した西夏語文献には仏教教典のほか日常語まで解読する資料が含まれていることを知ると，1925年に直接北京に行って資料を得，以後は西夏語研究に没頭し，次々と論文を発表する。ネフスキーは，1929年秋に単身帰国し，まもなくソ連科学アカデミー東洋学研究所研究員としてアジア博物館で充実した研究生活を送って西夏語のほか多方面の研究論文を発表するとともに，レニングラード大学と東洋語専門学校で日本語を教える。ネフスキーが祖国に帰国することを決心した最大の理由の一つも，実はアジア博物館所蔵の西夏語資料の研究にあったとされている。1933年には，市川房江その他の多くの関係者の尽力でイソ母子のソ連渡航がようやく実現した。だが，一家水入らずの幸福な生活もすぐに終わりを告げ，1937年にはネフスキーとイソ夫人は相次いで逮捕されてしまう。公式発表では，逮捕後にシベリアに送られ，1945年に別々の収容所で死亡したとされてきた。しかし，最近，ネフスキーは1937年10月4日に逮捕され，ソ連内務人民委員部及びソ連検事総長委員会の同年11月19日付の決議で極刑を宣告されて，11月24日にレニングラードで銃殺刑に処せられたことが明らかになった（桧山真一「弾圧されたネフスキイ夫妻没年と死処判明」『北海道新聞』1991年8月9日夕刊）。ネフスキー夫妻は逮捕直後に多くの東洋学者と同様にスターリンの粛清で銃殺されてしまったのであるが，ネフスキーはスターリン没後の1957年に名誉回復されている。柳田国男を中心とする民俗学者・民族学者との交友を通して，オシラサマや宮古のアヤゴの研究などで日本民俗学に貴重な貢献をした一方で，大阪転居後には西夏研究に多大の功績を残した。1960年には，ネフスキーの最大の労作であった西夏語関係の論文集『タングート（西夏）言語学』（二巻）が刊行された。1962年には，これらの研究成果に対してレーニン賞を授与されている。

柳田は，『故郷七十年』（のじぎく文庫，1959年）の中で，「ネフスキーが日本のためにつくしてくれた仕事は大きくわけて三つあった。あるいは学問のために働いてくれた功績といった方がいいかも知れない」として，第1にオシラサマの研究，第2に西夏文字の研究，第3に沖縄の言語の研究をあげている。このうち沖縄の言語の研究では，ネフスキーは「われわれと同じく現地へ行き，現在の言葉が，何年何月ごろのどこそこでは，これであったというふうな報告をして，事情を明らかにしようとした。非常にはかのゆかない仕事であるが，その功績は無視するわけにはゆかない。（中略）しかもそのノートは葉書大の白い紙に，暇さえあれば書き留めていたものだが，それが，今も東京に残っているのである」と紹介している。これらのほか，アイヌや曹族の言語や民俗の研究もネフスキーの仕事として無視できない。1915年に来日し，革命のために1929

年まで帰国がかなわず，官費が途絶えてからはロシア語教師として生活を支え，経済的にも苦しいなかでもきびしい姿勢で学問に打ち込んで研究を続け，ネフスキーはその短かった生涯に比して民俗学や言語学などの諸分野で極めて大きな研究成果を残したといえる。ネフスキーは研究者としての真摯な態度や精力的で旺盛な探求心などから多くの同僚や研究仲間に尊敬されただけではなく，「他国の習わしを尊重する資質と，他国の習わしを知りたいという熱望がしぜんに備わっていた。自分の博識を少しも鼻にかけなかった。また，土地の言葉をマスターし，そこの生活に興味をもつ異国の人を，土地の人々は避けたりしなかった。それどころか，多くの人は彼の役に立つことを誇りとした」(『宮古のフォークロア』) とあるように，現地の人々にも歓迎されていた。ネフスキーは政治的弾圧により生命や幸福な生活を奪われ，その生涯を強制的に閉られることになったが，偶然に携わった日本の民俗学（民族学も含めて）の世界に大きな足跡と貢献を残したといえる。

（参考文献）

ネフスキー著・岡正雄編　『月と不死』平凡社（東洋文庫185），1971年

ネフスキー　『アイヌ・フォークロア』北海道出版企画センター，1991年

ネフスキー著・グロムコフスカヤ編　『宮古のフォークロア』砂子屋出版，1998年

岡崎精郎　「ニコライ・A・ネフスキーの業績と生涯」『懐徳』33，34号，1962年

加藤九祚　『天の蛇－ニコライ・ネフスキーの生涯』河出書房新社，1976年

高橋盛孝　「ネフスキー氏について」『日本民俗学大系』12巻，平凡社，1959年

中山太郎　「持方の一夜」『旅と伝説』2巻3号，1929年

藤本　強　『もう二つの日本文化』東京大学出版会，1988年

柳田国男　『大白神考』（著作集第11巻），実業之日本社，1951年

柳田国男　『故郷七十年』のじぎく文庫，1959年